へ13
2897
5

へ 13
號 2897
巻 5

昭和九年四月購求

本邊

福嶋屋

宮崎

雲妙間雨夜月巻之四

東都　曲亭馬琴編次

第八套

倭文千の雅鷹下

木賀十郎光輔へ。伊原武章ぐみぐ罪を祈まつりつ。大ゑ驚た。

ぐとれを禁獄しつ。家隷且利長綱といふものと。太郎五武章ぐ家へ遣しつ。

蓮葉ぐ死を展撿さてそれを葬らつ。武章ぐ祈書を披見しつ。因縁

由を考るふ。その累ゑ云。無名山寺の雷神法師ゑ。ぬの悪僧ゑつ。武章ぐ

宿恨あるりのと。件の悪僧ゑぬる年。近江國小幡の同九物右衛門ぐ牛成

騙らりしつ。遂ゑ寃枉ゑ係りつ。武章ぐ妻非命ゑ死しつ。ふたりの子

ぐも又いくその艱苦を稟。ゑるゑ武章。そうぐも昨夜武蔡ぐ家へ

到りつ。雷神ゑ撞見。れを撃んとゑるふ。彼とやつ燈燭をうち滅しつ。

闇夜ふ紛れて逃去んとすると。追留るとく悔て嫂蓮華ふ向て負し。立地ふその命を絶う。かまび自の罪ハ悔て詮す。只願くハ雷神が往方を索て追留さ。武章が為ふ冤を雪ぐ。ひたすら恩恵を泉下ふ耳ん。ふもべしとぞ書さうる。光浦ハ元来武章が才を愛ふ深り云ふべるの為体を問考ふと惜む。亘利長綱をもて。雷神が往方を探索さるよ。雷神ハさうあり。白雲黒雲も。夜の中ふ逐電して。往方定うるんとすると。光浦笑て。去ることハ武章が公。片言ふて取用ちゃ。彼法師が日来の行ひざまを。里人ふ云そうて。集合て問考ふと。長綱これをうけ。ふ長綱。聽て彼山院ふ行ちて。里人ふを呼つて。この一件のるを説ちゃて。雷神が人とあり。又彼寺ふ住持ちる旅僧を問ふ。里人ふハ。彼悪僧ふ魁らまて。武章を

をいて憎ひ。先住の冤魂を消度せ。景迹を述。只願その道徳を稱讃ふ。吾が彼清僧の稚角をもて。その法験の灼然ハ面あるところ。光浦日来柔和忍辱ふて。毒ちるも邪淫貪婪の行ひ。ふ武章。恨るあり。嫂を殺し。罪を雷神法師ふ假托て。命を助んと計るの欲。ちう行ふ彼清僧。ふるの徒ふ対て。ふ地ふ。ふ世ふ。豫て抖藪の宿望を果さんとの志ふて。山院ふ。ふ。今武章とその黒白を。ひあらんもとうとぎて。迹を埋ふ。ふ異口同音ふ。長綱ふ。里人ふ。ふ。主君ふ。ふ。光浦ふ。ふ。不便ふ。武章ハ死刑ふ行ふ。ちうハ。彼も由緒ある武士の果ふ縛首刎んハ情て。古実ふ。無名寺ふ。腹を切ふ。と仰ふ。

る狂ふ直利長綱ハ主命を武章より伝へ聞て。既よその准備をいとゝ
ふ。頃ハ三月の中旬なれバ。吉野山寺の櫻花。爛熳として。誰をまつらと
衰ふ。かゝてその母とうよ敷皮布にて。木の間木の間より白たゝ幔幕を張らし。
豆腐の雑兵五六人武章を守護し。引く敷皮の上よりまつるゝ。又一人白木の小
四方よ。短刀を載せ。その前よ居直利長綱床几よ憑りて。正面よあり。雑
兵騎左右よ列居て。非常を警るゝ。いと嚴重なり。武章ハ淺黄上
下被て。髻を切て。ちらゝ〳〵ふ臆して。まゐもるく。こゞ長綱よ対て
領主の恩恵を礼謝し。たゞ〳〵坐を白く。徐よ襟を引て見こ〳〵
錯の兵士切靴ちる刀の目打を湿し。そゝつと抜て後よ立。そのとき
直利長綱ハ武章ふ対て。いふ。m辺今度の災害ハ。主君木賀殿を
ゝめとて。長綱ホよ至るまゞ。いと惜き次第ふ。みゝ〳〵罪を許ゝ

ゝ操の健気なるをめ〳〵。ゝゝづ推量てとそひゝ遺をゝもあゝべ。何よ
ゝん。ゝえのゝとふふ武章答ゝ。この身薄命なれ。終よ平生の志を演よ
及ばゞ。ゝゝか盃毒ふ命を隕し。おのれ又とゝるに罪をゝるゝ恨ゝ〳〵悪傷雷
神を走らして。生ゝ〳〵その穴を喫ざるゝ。ゝれも又審よいひがに近江
ふ殘し。おゝるゝ子どもらゝゝ。さもゝみゝるゝのゝゝ。彼ホ幸よある人の
庇を受ゝれバ。道路よ餓死をゝゝ。ゝゝみへ至し。ゝゝあゝゝもいふ。
彼ホゝ。今日のゝを偽ゝ。この地へ変へゝるゝもあゝべ。最則の為体を
ゝゝえゝし怨敵雷神ゝゝゝへをゝゝべ。又母の讐を報ひゝ係累の汚
名を雪ゝべし。と言告ゝるべとゝ。長綱ゝゝ〳〵委曲その意を汲ゝ。
ゝ易ゝと應し。頗よ涙ゝちゝみゝゝべ。雑兵ホよ至ゝゝ〳〵不覚よ袖と
濡らしけり。ホゝも春の夕れよ入相の鐘ゝとぼゝゝ。霏〳〵と降ゝ花び

雪吹とのろふも今ぞ消ゆ武章が氷の刃押戴て狩場のもとひも
あくど。唯ゆの肚突たそろ。浩ふゆ。才賀の近臣汗馬ゆ鞭を鳴らして。莫馬
直ゆ馳らし来て門外ゆ馬騎るるちて。境内ゆ走り入り。かくとえんく大ゆ
驚た領主の命あり。ちぞ刀を引ゆ続ひしめひそとなびうけく。喘く
ほとゝ近く走り来る長綱ゆ射くいゆ。主君僕をめく。武章ゆ向
のふるすあり。繹急ゆんべ。直ゆ同べくやとゆを長綱ゆものど。仔細ゆ及
つどろくと應しうべ。近臣聽く武章が耳ゆ口をさゝあり。鷹綱ろ
るゆ。辺の兄太郎五武恭。その奥妙を究るふ。近曽頃死しゝ。後ふ
れを受伝るのゆ。就中。傷つたる鷹を療治るの奇方ふ
至くるゆく亡んるゆ。と歎ゝ辺その舎弟とくゆ平日ゆるゆあるゆ。
一言を惜ぞく。後世ふ伝るとたふ。その益を甚しかゝんゆ由を問ん

為ゆ。領主の命を稟くゝゆ。武章ろ。回答を笑ふ問とゆ。武章ゆ之
つくく。答んとるふ。神既ゆ悩乱ゆつ。数回息を吻た。声をゆ立くゆ
ゆ。変る狗の技ゆ。ものゆ好ざるをのく。後くゆるところ。ゆ武恭ゆ。その術
の伐んるゆを厭ひく。書面るゆものゆ。ちるゆ。ゆ進らるゆ。
ろとゆ。ゆ兄久く領主の庇を蒙り。ゆの又兄が恩賜の雪の山
の名ゆ托く。書を子どもふ寄るるものゆ。ゆ所ゆ。
ゆ武章が没後ゆ。ゆ実の汚名を雪めゆ。ゆの子。彼悪伝ゆ環
會く。讐を報ふるゆ。今ゆ七日が間ゆ。武章が墳墓の傍ろ
ゆ。ゆ艸忽地ゆ生ど。それゆ変るの妙芽くゆ。ゆ
いひ果く。突立る経刀を雄ゆのゆ。ゆ引続く。狩人ゆ声ゆ共
ゆ首ゆ前ゆ落。軀ゆ俯ゆ倒る。時ゆ享年四十餘歳ゆ

ぶき齢なり。かくしてか長綱ハ武章が屍を無名寺の墓所に瘞
まし。さらし里人ホを喚びよせり。その不幸をあはれび其住の空院となりしが。
汝ホかゝる事しらしこれを衛るべし。武章が土饅頭の傍にめづらしき
ざる艸の生出るのありぬべし。告示し給へとのたまえたり。遂に近臣とても心
立入りて。主君光輔に。武章がいひつるの一五一十を演説ば光輔の
いかゞく嗟嘆し。ふかく思ひ給ひて。みな色楽しからずみえさせ給ふが。さう
ありとおもひ給ひ。次の日より毎日に近臣を無名寺へ遣はし。武章が墳
をみんとせらるゝに第七日の朝まだきに。番守の里人来りて申すにハ
せり。吾儕今朝殿の御使を稟て。日々に武章が墳をもりてけるに
昨夜只一夜の中に。彼墳より異艸生出て。莖の長さ凡その一尺
五六寸におよび。稚紫萌茂り。花開てにほひ旬ありなり。除て其そ〳〵せ

ると仰せらるゝにぞ。来り乗りてそれを光輔これを聞て。されバこそ武章が
誓言空しからず。これ是を面のあたり鑑定せよ。とて馬を牽出させ
おどろきあはて。直利長綱以下。五七人の近臣を粉して。馬にうち跨り
件の里人に御導させて。無名寺に到り。主従その草を見給ふに
莖ハ細くして長高く。葉ハ河原柳に似て四方より生て相對ひ。紫
の大さ一寸四五分もあるべく。葉の際より小枝を生じて。黄なる花開
けり。光輔ほとくとくして。なめらく嘆賞し。長綱を見かへりてのたまふ。武
章ハ蓋世の英士なり。又武恭が為に。庇蔭の恩を報んとて。今彼
に一言を遺し。身死して鷹の妙薬を傳ふ。これ常に忠なるにあらず切艸
なるべし。むかし人皇六十五代花山院の御時に。鷹飼晴頼といふもの
あり。業に細しきて神の如し。鷹の傷つくことあるときハ。草を採て

これを伐人草の名を問る。私〳〵いとど。そゝれよ家弟露よとれを問
せくべ。晴頼怒るその弟を殺せり。これ迚る時の人。奢の良茶をこ
ゝ。その草を名つけく。弟切草とらくとり。ふるゝ今の人草の
のゝもりて。その形状を審よ見るあり。或ハ弟切草ハ紫苑ゝらしゝ。今
それを云るふ紫苑よあくべ。晴頼ハその家方をあ〳〵ゝ思ふ。弟を切害し
それへ因法の紫止ぐゝ。武茶が弟を切らして。この昊草を行くゝ。嗚乎
草の名故あるゝ。憐ぶべ。武章。究苦を抱く。終よ仇を復とゝる
ど。一朝殃を釀〳〵。非令よ死ども慍るゝ。それ為よ思よ茶ふ願
奇ゝ。疑らくハ里人ホ。彼雷神よ祈ゝ。惑ひく。武章
逝るのの狡ひと不審とゝ。その言ゝ殺〳〵ど。忽地一人の彷
徨。二人の俗客をわく。門内よ入り。そんかゝ見ゝ云ひ

の外ふゝ。弟の荒ゝとゝゝ人光浦主従里人ホ。その声を聞て不審
首を回らくゝその人を見るふ。曩よ逐電ゝる。弟名寺の後住
ゝしゝ里人ホ。玲咲ひ。貴僧ハひゝ。ゝ年。先住の寃魂よ祟れ惑ひ。
ゆ〳〵ゝくなりゝひ〳〵。何の顔ゝく。阿容〳〵と為ゝ不ゝ
と問。後住の法師。莞然ゝく。小僧愚ゝとゝへども。一院の住持
たり。ゝ女〳〵く亡魂よ驚ゝん。不覚の挙動をいくゝ。
ゝゝあれ。ゝ急ゝ〳〵べ。入よ告るふ及ぐど。出〳〵ゝ駿の月氏
行くゝを。さゝ入ゝも理ゝ。今況とゝを笑く。疑ひをし
ゝく。と回答つ。光浦が母ゝ近くゝゝ。愚僧當院よ
住持〳〵。程もゝざれべゝ領主の見条よ。去年先師
迂化の後。彼弥同宿ホ。ものが隠慝の度覚ゝと阿く。種〳〵の流言

をりく。その非を掩んと計校。先師の寃魂。夜々顕れ出るといへども。狐狸のなせる事とのみ。さる怪異出来るゆゑ。同宿ホ先師年来の苦心を積み。石壇修造の為ニ。檀越布施の金銭を。人ニ預かりし手形を盗とりて。逃去ぬ。をりて愚僧先師の風志いとゞ人の伝ニ。近き山里ニ躲居るを。数き。密ニ彼輩が往方を探問ニ。一里人ホみな告ぐ。只ちとうその所ホ到りてある人ありを問ふ。その人答て件の伝ニ。今朝甲斐国へと。旅ごろつき追蒐ゆくと。愚僧ハ。愚僧ハ。ゆくゆくと頻りに忙しく。ぬるびるゆるふなぐ。ごろつきものゆゑ。甲斐国へ。墓が原ニて追到り。彼伝ニが幽死山寺ホ寄宿ありと。辛じく尋出し。縁故を問ふ。されどもいまだ彼も先

人のうるさとべ。その地の領主ニ訴へ。罪をるべくハせど。追捕ありて。精を散ゝく立ち去る途中。黒駒の驛ニ宿り。夜中風雨やあり。俄頃ニ。のゝしりを。宿のあるじも。いろ〳〵のものを問ふ。縁由を村長ニ告ホ。村の路頭もあまべ。家ニ。あとをう果るとまつ行ニ。彼ホ手を新く。やうやくニ平愈ニ。物いふも生平ホ異らず。てきの黒駒を殺ニ。宿のあるじと村長ニ送ふ。まくうるふ。藤本のとうさうの松原ホ。面魂いかめしげなる法師二人。うち相語ゆくを。ゆべ。一人ハ。吾僧底倉の学者ホ。寃魂ニ打扮。生道ニホを驚ス。その後雷神ニ従ひ。ちぐし酒肉ニ飽ぬ。その後ハ。ちぐしあたのみ。忽地その殺ス。昔の山客ニなりぬ。山客ハ山ゝ果るとハ常言も。今ハそ

墓ホ
伊原武夢碑
名寺後住

木賀子帛光蒲

ゆひちらしうるさしとゆふ。又一人叮嚀と笑ひ。そんなのをうらん。山客よハあ
ど。川さうるべー。山ともあるさ。川ともあれどらうさうを狼狽廻りそ。捜出
されてハ悔るも及ど。後へや上るべき。陸奥へやちぶんとゆふを。愚僧後よ
蹤きうーらをゆさそハ先師の寃魂ハ。狐狸の所為うとちりひーよとの
悪僧ぞふがうをーく。川捕ゝく責問べうる。細ーををちるべくれど。ゆ
悪棍よのめらひうく。却ゝ毛を吹瓶を求やせんと。然止ーく。又逃ー
うう。と一五一十を物ゝくれば。黒駒の村長ハ。客店のあるじゝもよ。又後
と前のゞ。光浦主後ハらゆもさゝく。里人ホ今との物ゝうを笑ゝ。そゞめて
曉るゆ。ゆる死ゝや。先住の寃魂を濟度ちゝるゆハあゝゞ。ゆる雷神ゞ豫
てふゝも汁狂るをふゝぞもちゝゞ。ゆと面うゝと咳ちう。後住の悪ゝく
ゞり来ゝるを欺び。村長と宿の主を労ひゝ。又ゆハ。ゆるまよ先住の

寃魂のうゝを生ゝとゆハ風声高く笑えーとう。伊弥同宿。忽地ふ逐
電ー。師又もゆゝくなうゆひーゞべ。とハ全く物のおそうゝく。逃去ゆひ
ねるとのゝ出ひるゆゝも。料藪の彩僧ゝうゝく。彼寃魂を結ん得
さぜんとゆふ逃られゝく。今ゝで師又をあーさゝふのゝひひ罵う。彼光僧
をゝる信ーく。活佛の出ひをるちゝそ悔ーゝん。師又が孫本の松原
ゆゝく又脱ーゆひうる悪僧へ。それが徒ゞゆゝく。白雲黒雲と呼ゝるうゆ
ゆゝん。そハうゝくのゆゆりそ。雷神白雲黒雲ホゞうゆと審よ笑え
ゝひ。又武章が横死ゞ切草のゆふ至るゝで。ちもうゝ物ゝくれば住僧
ゆゝく大ゆ驚ゝ。累伝各位ゆも告ぞーく。漫よ遠く出ゝる為ゆ。ゆる不
思議のゆゝ生ゝ来ゝつゝゝゝ。ゆ悞ゝと後悔ーく。慚愧面よあゝられう。
光浦ハ生徒のゝ不ホを笑ゝ。嘆息ー。和尚。山院の住持とーく。ゆゆもう

なぶとぶへるとう。他くちく。人を追出んとらさせへぬ。その上誠庶うう。又
里人ホが。私ま雷神をそゞめく後住と。剰られる惑され。武章を究
ゝるる。その罪いく軽うべ。ゝまる慮の浅をよゝ。ゝ件の狡を
惹出せう。かれば住侍へ今ゝう難苦を厭ゝど。彼此を募化して山院
を相續し。里人ホハ力を戮ゝ。この寺を立且武章が菩提を吊
て。前の罪を贖ふべし。とのゝ等雨ゝべその度ハ許ゞさ。とゝびく
ゝひ懲ら。黒駒の村長客店の主ゝ。引出物をゝびく。甲斐國へ帰ゝし。
いく武章をゝと惜ゝそ。その子どもを憐ゝゝひゝゞ。近江とのゝゝ
て。在所定うゝざれば彼ホを扶持ゝう由ゝを遺憾を。武章ゝ子
どもゝ。この地へ帰ゝく来ゝとゝゝとゝゝぞ。かく光浦ハ。彼草を採ゝ。傷
つたゝる毒ゝ侍るゝふ。その切神のゝどくうゝ。ゝハ疑ふべうもあゝゝ。

寸切草ゝとゝく。菜園ふゝう。植。鐘愛ひとぶふゝ多れ
稀ざるふ越後名寄巻十六ゝ云。寸切草ハ。諸郡。原野。村里皆
生ど。茎一二尺許。葉ハ河原柳ゝ似く。短く。先圓。表ゝ
細ふく。背ゝ白く青。葉ハ四方ゝ生く相對ゝ。葉の大
ゝる者。長一寸四五分。葉の際ゝ小枝を生ど。夏の末五出
の小黄花を開ゝ。年ゝ宿根ゝて生ど。甚繁茂ゝ。
寺嶋曰云云 嘯頼の説
金瘡。折傷。一切無名の悪瘡腫物ゝ。葉を按。煲煮ゝ
出るを付ゝく良。 ○海船齎。ゝ乳繪の具ゝ。綿胭脂
とゝふのゝ。俗ゝ生胭脂とゝふ。繁きゝ。寸切草の生葉を搾
ゝく。汁を綿ゝ浸せる物とゝふ。我 朝ゝく。この草を斷近ゝ云ゝ

といふ。本草臙脂の集解。種〻の草花の汁をそめ。綿を除てべと
らる法あり。又蘇木の煎汁を。胡粉を浸し。綿に塗る。生胭脂を
賣るものあり。生胭脂は血を止るふ甚效あり。○貝原云。本草
湿地下の蛇銜草は。ちごり草に似たり。同書劉寄奴。集解時
珍。説畧ちと切草に似たり。○大洋子云。按ずるに二種あり。本書
よりは功能多し。一種小草あり。ひめちと切草といふ。功能甚多し。
選べし。○馬琴云。予が曩に著したる。俳諧歳時記。芽切草の
條下に。これらの説を偏せり。因に今ちふ緑色。芽切草。むしはちと人
稀なりしかや。近ごろ〻人もちりてひ〻。審に説ちまくぬ

第九套　卯月の舞雲雀

伊原二郎次郎武章が子ども。妙。麦次吉。いねる年ちり。山田信二郎
詮通が庇を稟ち。江州観音寺の城中あり。詮通ふく彼ホが孝
心に感激し。家に養ひ。ちの子のごと慈しみ。手習ひ。物讀せ。又
麦次吉に弓馬剣法を教ちる。武藝その器に堪ちるとぞ。
ひ〻ねるあらぬ。年長ちる方なれども。立勝りてぞ見えし。かくて次の年卯月
上旬。詮通ハある日的弓を射んとて。妙と麦次吉をもひて庭に出るふ。
日和好ちく〻雲雀を畜狎。效ちり生ひ〻高く舞ひるとぞちり。
雲雀ハ主の手に從ひち。或ハ上り或ハ下り。進退ちろふ任せるごとちるる
あり。終に逃去らずして。效ちるに入れば。詮通ふく〻寵愛せり。この
日も雲雀を。效うのぶ〻庭ふりて出。的を射果ちるでとのちるまも。ねせ
ずやとて。ぶ〻效の門を閉ちさ。麦次吉とも。矢うらく発ふぞ。
雲雀ハ驚き效を出。蒼天を指し翔揚る折しも。雄手うる岬ちり。

白斑の鷙忽然ともくもつ。雲雀を逐ふく。矢庭に捉らんとと。注通
通佶とえく大に怒り。あと射くるれ。くらひも果ぬに。妙に吉ぬ今
刺くる弓矢をきりくと折固丁と殺せばやきくど。鷹の直
中を射くりしが。鷙の矢を負うぐり。雲雀を学ぶと搔爬。端然
とくく死くりくる。そのとき注通の妙に吉とくもみ走りうつ
件の鷙とえるふ。既に死くれども倒まくど。雲雀のいくく爬まて。
られもそや死くく多り。注通憎さも憎くとて。ゆがて鷹を引紀せば。その容
易ぬあめくで。全体雪ふり白く。望まれ。秋戮の道を辱く。楚
王の為ふ鵬を落せるみも。をさく形らくとえゆる逸物ふり。
頂に盤を載られぐく。羽毛に白狼を延るがどく。前にむくを
腰のくありく。羽翼見えど。後に見まれば桃泉毛上に落ると疑る。

前眼るとたに軒のごくうのべく。眼の光に明星に似くり。尾魁。夏助。
背。待尾。嶋羽。石打。芝川尾。只一枚に鷙を伴ふく馬を遠
くく。懸孔。鳥栖。多り子の指の尖に至るまで。善相ふべとにと。
注通これを見くに大に驚嘆く。妙に吉ぬにふ。この鷹にこと
稀なる良禽ふり。これ今雲雀を失へうぬと惜むに堪られど。この
良鷹を射殺せるふ。それも拂うて送憾甚く。一時の怒に乗く。
くも怒ぶくく射さくたるに。注通が生涯の悔ふりとて。後悔大
かくるくざりければ。才に妙と面をあんく。射藝熟練の人ふりせば。
殺さでも射く捕べきに。拙き矢前のうぐれ常りが。鷙の不運きふ
らんく。と回答つく矢を引抜バ。注通に入鷙をうち反くえく大怪。
ある不審。この鷙の足に一封の書翰を結びつけきう。さてさ

信濃の国住人
伊奈三郎八十吉

主ある名ふとて。ゆゝあるとん。解くるとう。とらべ爰に吉牝〻く。彼書翰を
とりてうち開き讀もさるべく大よ驚き。こゝろぐ又武章が今殺の送
書あるくいひ〻といひつ〻涙をかゝ拭へば。妙ゝさゝゝと注通りこゝ〻
いふと呆れ惑ひ。さく〻讀ゝ〻ゆせよ。とりのよ兄弟うるく讀べるに
胸ふさぐりて。涙ふ声も隠口のそどめふ太郎丑が蠱毒ふく死〻らる
る。又雷神が為体。その骨相よ至りて審よられを写〻。雷神を
殺さんとて。悞く嫂蓮塚を切殺せ〻一五一十。太郎丑が日ゑ殖愛
の奢る。雪の山よ書を托〻く。嚴期よ一言を告る旋を書写〻。怨敵
雷神を殺漏らして送恨甚〻とりへいも。悞く嫂を殺せ罪とりふせん。
ようてみづゝ。領主よ罪を訴て刑を受るのゝ。ゆゝりの子ゝも又が志
を継ゝ。悪僧雷神がゆくへをさぐる。宿恨をとゞるさせらと讀ゐ果ど

とゝり落る。涙い泉の涌がごく。声を惜ど泣よりり。注通りと理な
ゆゝられを慰ゝくとりゝゝ。花鳥ゝろゝりて。書を百里の遠ゝ
伝ゝとゝぐも人い眼眩〻となえて知覚らべ。忽ち一前よ射殺させ
いゝれも送感ゝりゝゝ。ゝゝあれど。物よ定数ゝりて。ゝる天よ係ると
とゝべ。武章が横死いさゝゝり。この奪るも又惜どもゝゝべ。ゝゝい何ま
も定業ゝとゝひ諦め。父母の怨を雪んゝて。ゝよゝる追福ゝゝめ
ゝく言培を喝〻く練〻ゝ。独。麦次吉いゝゝゝゝ泣ゝ。ゝゝ
ともよいのゝゝ同胞。殿のれ底よりゝ。路次も呻吟ず。親
とも師ともゝひゝる。そのゝん慈をのゝゝる恵恵の湖水とゝめ
とも尽べゝゝ。ゝゝる過世あゝくと。又も母も非命よ世を去る刺
恍人の往ゝをゝゝど。加之。ゝぶ伯父のよ神ゝ〻意のゝるゝと

父が使をいさぎよくぶつと射殺す。恩ある鳥をいたづらに
をくるとて豈孝子のこころあるべきや。願くは今より身の暇とた
まはりて底倉へ赴き面めぐりに父が喪ある迹をもとめん。最期のすがた
も尋ねん。雷神が往方を索めぐりひべし。このよ行くへ知れとうき
は涙つゝ同胞が今は只父の像見の遺書よむ〳〵涙を抱て袖
の雨はなが旭の旭のあくるまゝ三つの枝の枝よりそれ〳〵歎き。詮通
が眼をぬぐゝ兄弟の哀傷さることなれども。はや忘たまふ。
底倉へ到るべきとて仇人なるぞ彼処にあらんや。他の嫂を殺さるものゝ
ようなんど。縁故をたづぬる里人ふるさとの人なんと父母の羞あり。苦の
苦の報あり。悪の悪の報あり。志稜らぬ。天運循環して居つ雷神が
在処もたづべし。曾我殿原が若ひ十八年ぬるべ。宿志を果すそれ

さて北條とらの後看あくまで剛敵祐経を狙ひ奉りたてまつる。況て
ホらの池を離れ難ず便りを望を遂んとたのみ。詮通ふ
うち任せよとのたまふ。偷〳〵。叮嚀ふ教訓〳〵頻に彼奪ふ人よりも勝
れ己を嘆賞〳〵己を終に人倫の礼をなして城外の曠所ふ葬ふ。
奴隷ホ。なるを埋るとて。土を起さるゝ。土中より観世音の小像を得る。
られるん妙。夢ふ吉が亡父母の二世の値遇ありとて。ぞ。その如し。
さゝやかなる堂を造りて。彼観世音を安置し。武泰武章。元江が仮
牌を。菩薩のまん前に居。更に一年石を建て。美麗塚と彫つ
けさ。且亡者のために追薦の佛事を修行さるべ。妙法蓮華経
まもる。詮通の高恩を感謝〳〵つ。底倉へ赴くまをありひとぶま
で。毎日小彼観音堂へ詣で。父母。伯父。雪の山が菩提を吊ひ仇

人雷神が往方をさゝゝあくと縛る外地ゆあるりりゆゝて径通い
主君氏頼よ妙夫吉がゆゆ。武章がゆゆ。雪の山が信義。雷神が隠慝。
もべくこの件のゆを。雷よゆえあげ。曩小物をつが牛を騙とりた
るゆゆ。雷神とゆゆ悪僧が不ゆるゆく。二命次命武章ゆゆ。ゆゆ
これを買ひゝゝり。遂よ連累さんしる。縁故をゆしあし。妙夫吉が至
孝のゆ俸をゆえあげゝゝゆゆ。氏頼ふゝく賞ゆゝつ。二命次命が横死。彼
夢のゆゆと不便ゆり。汝。妙夫吉とゆゝんを補て。悪僧が往方を
索。怨を報せんと仰ゆるゆど。径通らけゆりて。家よ退ゆゆが主命
の慈を。妙と夫吉よ説ゆし。夫吉が武藝今一両年よ煉ゆゆ。
ゆれりゆゆ。緒岡を編壁ゝく。宿望を果さんとべ。ゆゆ四方の
恩澤ゆれゆりゆゆゆゆ化よゆゆゆゆゆゆゆゆよ。妙も茅も感涙を

拭ゆゆゆゆ。ゆゆ志を励ゝつ。夫吉よゆを委ね。且
同胞日夜己を責ゆゆ。径通よ仕ゝゆ。奴婢もゆゆよ羞て。
その誠心を稱賛ざるゆりけゆ。

第十套　鏡山の朝雲布

さても元僧雷神ゆ。底人君よゆゆ。武章が一力を脱出。その夜とるゆも
とりあゝど。彼山を遂電ゝ。径ゆ往方ゆ定めゆど。是首彼首と互潘
びゆゆゝく。近ゆる。鏡山の麓を過ゆよ。此処ゆ故郷ゆも往遠ゆ
ゆゆゆりゆる人よ遂りゆするとゝ。昔熟生る山路ゆれゆ人もゆゆゆ
間道を往ゆ。守山のゆゆ続ゆゆんとゝ。頃ゝゝも五月四日のゆゆゆ。
天俄頃よ結陰。雨降ゆゆゆ。盆河霞すゆゆ。山路ゆ出ゆゆゆど
至ゆゆもゆゆゝ。樹のゆよ立在ゆ。晴ゆを俟よ雷の鳴ゆいと

鳴神伝師

烈しく電眼を射て瞻望すれば。ちぢ〳〵ありて雷声あるべきなり。雲霧て夕陽山の挾より斜なり。日られたれども。そぐ難儀なるべしとなれど。濡るる衣を絞もあへず。樹のかをきり。やく〳〵といそぐ五六町よりなほどとなれば。ゆりたる楠の間より挾をなる。苦〳〵しげに嘯くあのありり。いと怪くて。近くなるまゝよりなれば。又見えぬ。ひどろ〳〵と獣あり。雷神られをとえあらんとあるやうなれば。世よりの雷獣なるべし。推量するかの。あの獠よりの樹の上より落なる。勢よりの楽〳〵。ゆる大木をお裂たるかの。終よ木の裂目より挾をなる。雲より乗るをゆるゆるとあば。世よりの未熟なる雷公もあるものなるべ。さらば助るなるべといひたれば。陽杖を突入をなるべ。とり〳〵なる搔出〳〵なれば。その獣忽地よえべ。さても逃はの疾れ奴なりとなる笑ひて。又やくとを三町よりと不圖胸のあたりをうい探をこの虚気〳〵。日のられぬ間よりの山路なるらんとて。ひた〳〵なれば。晴間を候なる樹のかよりの。ひた陀袋なれ忘れなり。彼内あの。運搬が像見なる。境なるあるものを。山路なれば。いとなるべ。なんとなりなるべ。とひとりごちぶとなるべ。とうとなんとするよ。日の忽地よ役果なる。いと暗なりつゝある怪〳〵なるべ。暮るるあの祝もあるべう。見ひつるよ。おくなる政陀袋を取らんるも便なり。今宵の宿山よ宿なりと。羽立の朝なるをよゆるべ。この山なるよ立なり。それを案るとも延らぬと。寄思〳〵なる。遂よ守山を投るいそぐよなれど。野干玉の烏疾なれば。路なる迷ひなん。ゆけともく〳〵里へ出ぬ。なるべ。頻よ焦燥て。右の左へとひ〳〵なるべ折〳〵も。遂前面よ。火光ちらくとえなるべ。さるの彼処よ人の住なり。と喜〳〵くとかの火を目当よ。辛じてその

ところよりもれくえれが果〳〵谷陰よ。一軒の草舎あり〻り。門がく諸折戸をほとゝと敲よ。内より女の声〳〵雄と問。雷神答しられい山路よ迷ひたる行僧なり。旅くいらの夜を明さ〳〵ものとの彼婦らんをゆるく立出。荒らる折戸を開れつゝのふ。この処へ宿するゆ家ものゝ〳〵と。嚮よりぶ夫ゆ〻りうるれ悦〳〵たるよ。れ身よ救れ作りしとゞこの再生の恩あるとが。穴鍋よ宿〳〵進らとべ〳〵。たりとも饗をべれ飯粒もなり。露宿せんまの。搔上るくもあ〳〵んりとゞゆくとも厭あるべやとゝのよ。雷神いふく怪をあぐ〳〵。のあち〳〵ものも問ゞ。縦一碗の飯ものらどとも。一夜をあるさ〳〵のぶ足りうんと回答するふゞ。婦点ゆとゞ〳〵ぶとるく〳〵とゝふ。雷神ゆ誘引つ入りとゝるよ。れのさまゆ常のあ〳〵ぶ。太古の穴居めれたり。れの内よ燈火をあるゞどのれ

と昼のごく。かくそりたる処よりの引めぐらしく臥〳〵たるゆられが夫ゆ。怪れよ。目今あるゞの婦が夫の必死を救れる恩恵あれゞどとるふく思ひあれがらの処ゆ雷獣の栖みめり。ちりのよ〳〵〳〵彼婦をうれゞれの内の明れも。これが身の中より。光を發ゝそどあり〻る。怪〳〵れゆ限れけるゞ。愁よ脱去とも。外よ宿るれのあけれゞぜんをべをゝ〳〵ど。るれゆもあ〳〵ぶうら瞻ゞを居れゞ。婦うち笑ゝ。客侍ゆ長途よ疲労をゆあ〳〵〳〵蝶ゆ垂れゞどとゝゆの絶とる。ゝく睡をあく。とゝひゝけを。棚るる木枕をあ〳〵〳〵。ゝるる蓀の細代屏風を建めぐら〳〵。この処ゆ身ゞ臥房よ行り。とゝ去〳〵れゞ。雷神ゆ庇の侍〳〵ざるは。をゝゝとゞゆえを。屏風の内よ臥られどゞゆとゝ〳〵うちとけを睡られゆ。〳〵ゝの疾のあけより〳〵とゝへゞ。夏の夜もいと長くとゞ。五三の

比叡にありつ。浩処に維といへども。外面に来て。門の戸をおとづれ小敲れ。海神のかん使なり。翌の節句よれ。武佐越川。小幡の間に。朝雨を沃ぎとなり。其の三月が間は。ちの卒番なるにかかるべく。鄰なるを。と高声にいひちらし。内にも入らず帰りたり。雷神これを聞ておもふずらく世にいふ龍神雷公を役の説。實に故あり。節句なれば降せらんともおもへり。猿路の雨は。これも夏めきと晴は。おのれの婦枕方りまで。客僧はよくぞ睡せしや。と向に雷神答て。いたく睡りしけんといふ。婦のされる。もてなすべきあり。甲夜にいたりて紛まり。法号も問はざりし。汝は何と呼れたるのと問ふ。そのとき雷神は屏風揺遣して起出て。いふやう。愚僧が法名は西啓綽号を雷神と称するなり。このくなれんといへ。江くすもやといふ。婦含笑て。さそれもあなたにはべれ。名よろしくあらせるべ。今は往の悪行。それが夫よ衢にれ身小板ある。雷公に候り。おのれ大木の裂目に挾まれたるされば腕を折傷しが。翌の朝雨に出づるし。元来やの男へ落ん。人を一疑るし。物我毀ふれ天帝のふりく識すようれが。その事明白よれ使えあげがでし。汝が雷神と呼ばれかのこそ幸ひまれ。詰旦くるが夫によりてあり。武佐小幡のほとりへ。雨を降らしてかへまうしといふ。雷神ゆゑく大に疑られ。愚僧は久米の仙人にあらねども。いかで雲に乗て雨を降するのをようせん。やとれともひもうけざるかたとて。固辞しが。雷公の婦又いふやう。雲の上を飛行するが容易からば。とかくほとめれど。そのかれ術あり。さりげて兼引かまいねど頼みこのみ使やるなぞ。雷神はことむかとえりしとひなかがらかくまでいはれて

雲色明巻四
十二
阿香
雷車

推辭とをいなびたまふ。公の婦慰めくやみ給ふ。夫再生の恩を稟。翌又夫の役よりつとめ給へ。いかゞ。世の報ひをもぞるべし。されども。四方い積惡の人は。さいなんく積善の。今より志を轉じ。祈ひを改め。誠の道に入べ。こゝに今一術を授け。彼りまんその術をなす。衆生のために苑しのぶべ。久後恙なるべ。自のためく。恨ある人に怨ちんと計めるべ。身をたとも又その術よあり。四方雷神と呼れたること。今霄の因に相稱と。名絃自性の理にとゝと。叮嚀ならひ諭し。さて雲中を飛行し。雨を呼び。風を發し。又水脈をとゞむる術を教るよそ。雷神い數回ようて。その呪文を記ゆる。雷公の婦又いふ。既にとの術を授ゆるとも。淫酒に懸念するにその術を立ぬに破るゝ。只先非を悔く。德を積めくゝと。たゞ〳〵教訓し。一ツの壺をとり出し。一條の篠の篠にもにられを雷神に授ける。四方羽翼の朝雲に乘て。武佐小幡のほとりに到らば。壺の水紙篠の篠に浸しく。いく度もたゞ揮めく。たゞ行に雨降るべ。水の竭るを期とし〳〵。この処へ帰りめく。すべも勢ひに踏み外し〳〵。ひそかにその〳〵を行ふに。夏乃夜くく明るに。折しもあれ。一朶の雲。聳起とうく。門方小起出る。雷公の婦指し〳〵。彼雲に乘てめく。時刻い今ぞといそぐ〳〵。されば。雷神い壺を抱て。篠をとく。内と雲に乘うれば。飄〳〵と雲に入る。鳥のごく。気に裹て。風に吹あげられ。ゆく〳〵中天に到るとぞ。

因よりて門人琴驢この段を清書せる夕弔ひの可し云光僧雷神が雷獣の家より歌を雷獣より代てとく。雨降る物語ハ捜神記以下の小説よりえらる。阿香のうゆを低てうえたりとかゝ也ごとくあるよ理外の論よりあべとかふ。弔答云浮説詭譎ハ小説者流の常語なり。ちなれども雷獣人を傭ひ雨を降るのをを。理外なりと難ずるいうよどゝ。世よ狐狸の人を妖をするハ。人常よりハ。狐狸と雷獣と。何の差別ありん。群書纂要よ。雷公ハ猪の首よりて足あり。両の指ありとかく。雷獣雷鳥の圖説粗巻端よ載とかくども。なほ盡さゞるをかく。再びとくよ證をべし。」

信濃地名考よ云。蓼科山よ栖鳥ハ。世よ圖をる鵜あり。画圖小安しの差あり。戴冠を。尾も長くさゞるのを。雄のうちを。むよ似て。高二尺計。黒色よ白斑あり。鳥鶏の如し。丹項の肉おを。雌あるの黄しの雌鶏よ似て。脳のうち黒く白斑あり。嵩穴よ栖を。松の翠を啄とかく。○後鳥羽院御集考山の。この御製前或ハこの山。蓼科夜半よ鶏明あり。あどりのハ。壺後のるべし。一トとを。ある月の末よ登山をあらはすよ一夜を明して。五十餘所を登る。この日霧ふりて。山よ人声絶るよりて。あの鳥六七ばかりつくつくよ。羽をたゝ。高く飛びさゝんををうして。数輩東西小豆ばかりを。豆をあぶ。杖をあしして追ふ。そゞろ甚しくして。ともも声あり。三度押て終よ石中よ逃のり。ぶ雛一ツを得て。雌雄石の間よあり。ひなを。その声虫の鳴が如し。幽栖の

うの根法師

鳥ぺよ驚るべく声を出さんず。鶏冠の妄誘るべし。離大サ極の
ごとく。鶏のごと月よりの○又この山蓼科に異獣あり。夏月雷
冊項いまだ雨の起るとき。小獣石穂より走り出て雲に入る。冬蛇の
如し。須臾雨盆を傾ぐ如しとなり。暴雨の後。山より
死しく流出る。小獣二ッあり。大さ小犬の如くして灰毛あり。
頭長く。ちらぢら羊に。尾は狐の如く。あさやかにして利爪あり
鷲の如し。古澤云。按ずるに。霹靂の地樹木に爪の痕あ
るものあり。土佐の国海辺に多く立起らんとす。岩上に小
獣あり。鳥銃をもちて射るに。かをり汁を出すものなる
べし。近年六月十日。暴雨に。農夫邪利を逃るに。電光一
發し。いづち耳のもとにひらめき。二人の者に落るものあり。さて

背に飛つき。肩を踏ぐ騰らんとするを。跡ある猛者。をしへ
かをして。かの獣を大地に投つみ。押えつけ。村人雷を
とらへたりとさわぎつく。その市の如し。その獣の狀右に
のふ少しもらがわど。近江国かぐや村にて。人のう
たりし。もさらふらるるものあるべ。明和七年因七月伊奈郡駄科村に
馬琴云。これら近世印刷の書といへども。実録あり。狐狸と
人親しくそのあるが怪を説ども怪しきに。雷獣の説い疑
ふものあり。予が管見にもしも博士ぶりて。蛇足の辯をなすと
あらばそのゆるところを弦するの。琴瓢遂小筆を添ぐ。予が
言をもそこの巻のをりに記せり。

雲州雨夜月巻之四 終